学園だより

Vol.72

2003.11
Nara Women's University

冬晴れの記念館（文学部 武藤康弘助教授）

シリーズ　情報と人間を考える ―― 1
原生動物の細胞間情報と奈良女子大学
春本晃江

教養広場　Liberal arts Forum ―― 3
変わりつつある中国の婚姻制度
野村鮎子
「きょうだい」をつくる時代?
吉原千賀

寄稿　私のチャレンジ ―― 5
和田悦子・Sultana Razia・金田光世

海外訪問記 ―― 8
中国農村ホームステイ記・・・・・**秋津元輝**
ケンブリッジ大学滞在記・・・・・・**和田昌昭**
在外研究―米国デービス滞在記―・・・・**山口智子**

こんな本を出しました ―― 11
加須屋　誠・三野博司・池原健二
岩渕修一・安藤香織・髙橋裕子

新任教官紹介 ―― 14

学生生活案内 ―― 15
外国人留学生による日本語スピーチ大会
広部奨学金授与式
学長主催留学生懇親会
外国人留学生実地見学旅行
授業料免除についてのお知らせ

奈良女子大学

原生動物の細胞間情報と奈良女子大学

春本 晃江
人間文化研究科 助教授
共生自然科学専攻・生物環境科学講座

TERUE HARUMOTO

肉眼でやっと見えるくらいの単細胞生物ブレファリズマ、それが私の研究材料である。体表には多くの繊毛が生えていて水の中を泳ぐ。ふだんは二分裂で仲間を増やすが、栄養状態が悪くなると、オスとメスのような相補的な型が、お互いの出す交配フェロモン様の物質を介して接合する。このとき一方の型の出すメッセージが水の中を漂って、もう一方の型の細胞に届く。これに誘引され、やがて一匹で泳いでいたブレファリズマが互いに寄り添って対を作り、有性生殖を行うようになるのだ。この小さな生物がどのようにして環境変化を察知し、相補的な型の間でどんな情報をやりとりして接合へと向かうのかが私の研究テーマである

ブレファリズマ

ブレファリズマは、生物学ではマイナーな材料である。どのくらいマイナーかというと、世界中でこの生物を使っている研究室は、二つか三つしかない。その中でもこの材料を用いて接合の研究をやっているグループは私たちだけである。

ブレファリズマは奈良女子大学と切っても切り離せない関係にある。生物科学科の分子・細胞生物学講座 細胞情報学分野の教授は、現在、髙木由臣先生であるが、歴史的に辿ると、先々代の教授であった稲葉文枝先生が、日本では他に先駆けてブレファリズマを用いて研究を始められた。

先生は最初コマユバチを使って遺伝学の研究をされていたが、戦後の食糧難でコマユバチの卵を産み付けるコクゾウムシのエサである米が手に入らなくなったと聞く。お金のかからない生物材料を用いる必要に迫られ、大学構内の池の水をすくってみたらブレファリズマがいたので、この材料を使い始められたそうだ。当時はまだ珍しかった電子顕微鏡を用いてブレファリズマやゾウリムシの微細構造を発表された。それらの研究のいくつかはこの分野では必ず引用される重要な知見であり、繊毛虫類の分類学にも大きな影響を与えている。

私は稲葉先生の直接の弟子ではない。稲葉先生は私が二回生を終えた春に退官されてしまわれた。稲葉先生の「遺伝学」は当時三回生向けの講義であったが、二回生の私たちはこの講義にそっともぐりこんでいた。私は稲葉先生の現役最後の年の講義を聴講させていただいたことになる。

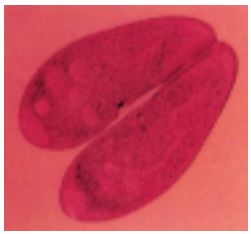
稲葉先生は、日本では女性で三番目の理学博士であり、国立大学では女性で最初に理学部長をされた偉い先生であることを知ったのは後になってからで、黒板を前にして話される先生は、小柄な身体でとつとつと話をされる素朴な方であった。半期の短い間に、古典遺伝学から現代の分子遺伝学までを講義されるのは見事であった。決して面白さを狙った講義ではなかったが、淡々と明快に遺伝学の真髄を述べられ、背伸びをして聞きに行った二回生にもよく聞いていれば理解できる授業であった。

ディレプタス

稲葉先生は二年前に亡くなられたが、そのときに奈良女子大学の昔の卒業生とお会いする機会があり、奈良女子大学の良いところは何だろうかと話がはずんだ。本学の卒業生はいろいろな分野で活躍している。奈良女子大学の学生さんは変に冷めていない、熱い情熱が感じられる、と言ってくださった他大学の先生もおられる。何人もの卒業生と話していて感じた本学の卒業生像は、真面目でよく働き、謙虚な姿勢を忘れず、元気があるというものだった。この伝統は今も受け継がれている。

やる気をもつことができれば、本来もっている能力以上の力も出すことができる。それは何よりも私の経験である。

「大丈夫だよ、あなたならきっとやれるよ」というメッセージを幾度となく奈良女子大学の教官から受け取ってきた。それは、私が本学卒業後、他大学の大学院へ進み、博士課程を修了したあと、米国やイタリアで研究生活を送っていた間も変わりなく続いていた。辛いこと、苦しいことがあったときに、そのメッセージにどれほど勇気づけられたろう。そのメッセージを発信する奈良女子大学の教官の方々がおら



接合中のブレファリズマ

れたからこそ、これまでやって来れたのだと思う。今思うと、教官たちは誰に対しても同じことを言っておられたのだと思うが、自分を信じてたゆまぬ努力をすることの大切さを教えていただいた。奈良女子大学の教官となった今、自分が受けたメッセージを今度は学生たちに伝えていきたいと切に思う。

学問は継承していくものだ。稲葉先生の研究をさらに発展させた形で、当時京都大学におられた三宅章雄博士が大阪市立大学やドイツのマックスプランク研究所の共同研究者と共に、ブレファリズマの交配フェロモン様の物質を単離精製したが、その後研究が途絶えたまま二十年近くが過ぎた。

生物学でこわいのは、いったんその研究材料を使う研究者がいなくなると、それまで使われていた株やミュータントの系統が維持できなくなり、急速に失われていくことだ。次に再びこの材料を使う必要が生じても、研究材料としてはもう使えなくなっていることが多い。私がブレファリズマの接合の研究を始めた頃も、まずこれらの問題にぶち当たった。まず、ブレファリズマが増えない。文献どおりにやっても、大量培養系に移すと日に日に数が減り、やがては死に絶えてしまう。よく増える株を手に入れること、それを大量培養し、いつも同じくらいの収量を得ること、必要なときに接合を高率で誘導できること、そんな基本的なことを確立するまでに約一年かかった。よく学生さんたちがついてきてくれたと思う。その後は幸いに研究が順調に進み、交配フェロモン様の物質の遺伝子を単離することができ、現在は、遺伝子の発現調節の解析や接合時に発現する遺伝子の同定を進めている。

ゾウリムシ

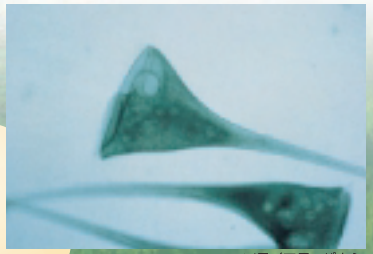
こんなマイナーな材料を用いて研究を続けていけるのも奈良女子大学のいいところだ。わが生物科学科には、基礎にそれぞれの研究を尊重する気風がある。教官も学生もひとりひとりが大切にされ、切り捨てるよりも救い上げようとする校風は奈良女子大学の特徴かもしれない。

マイナーな材料を用いて研究をやって何になるかと問われることも多い。決して誰もやっていないからというだけの理由で材料を選んでいるわけではない。ブレファリズマは繊毛虫の分類では興味深い位置にあり、有性生殖の起源を探る上で貴重な材料であるからだ。

マイナーな材料を用いた研究により、新しい発見がなされることもしばしばある。RNA自身に触媒機能があることを示したのはコロラド大学のチェック(Thomas R Cech)博士らで、地球上に生まれた最初の生命は遺伝物質にRNAを用いていたという説を唱えた。その真否は今後にゆだねるとしても、生命の起源について新しい仮説を提示したことは確かで、これらの功績に対しノーベル賞が贈られた。今でこそテトラヒメナは生物材料としての地位を確立しているが、当時はまだよく知られていない材料であった。ノーベル賞につながる発見前のチェック博士に一九七九年の国際学会でお会いしたが、テトラヒメナの様々な株でRNA遺伝子のイントロンの塩基配列を調べた地道な研究を発表されていた。これが数年後には大きな発見につながるとは、もしかするとご本人も思っておられなかったかもしれない。ある時期に自己スプライシングが大量に起こるテトラヒメナを用いていたからこそ、重要な発見ができたといえる。

接合中のゾウリムシ

もちろん特殊な材料を用いているだけでは重要な発見にはつながらない。大切なことを見抜く感覚が必要になる。そのためには、生物学の根本的な問題に立ち戻り、それぞれの生物材料を熟知し、材料の特徴を生かした研究を行っていかなければならない。小さくてもいい、堅実な研究の成果を奈良から発信していきたいと思っている。


ソライロラッパムシ

変わりつつある中国の婚姻制度

野村 鮎子
文学部 助教授
言語文化学科 日本アジア言語文化学講座

AYUKO NOMURA

元来は中国文学が専門だが、この十年ぐらい中国の女性問題にも関心を抱いている。最近のホットな話題といえば、今年十月一日に施行された「婚姻登記条例」であろう。改革開放以後、中国の経済や食文化に詳しい人はずいぶん増えたが、かの国の婚姻制度について知る人は案外少ない。ただ、大学生は結婚を身近に感じるからであろうか、教養科目の講義で中国の婚姻制度を説明すると、ことのほか熱心に聴いてくれる。

学生がまず驚くのは、中華人民共和国婚姻法の中に計画出産（一人っ子政策）の遂行義務が明記されていることである。二〇〇一年の改訂では家庭内暴力や家族の虐待や遺棄についての禁止条項も加わった。日本の親族法が私法として民法の中にあるのに対し、中国の婚姻法は、社会主義国家における夫婦や家庭の権利義務を規定する公法としての性格も併せもち、民法から独立した単独法である。そのため国家の政策が如実に反映される。

また、結婚が届出ではなく申請によるものだということについても、学生は驚きの声をあげる。婚姻届さえ提出すれば法律上婚姻が成立する日本と異なり、中国では結婚しようとする男女は揃って登記所に出向き、「結婚登記申請書」を提出しなければならない。代理や一方による申請は認められていない。婚姻が自由意志によることの確認のためである。審査を経て結婚が認められると、夫婦それぞれに「結婚証」が発給され、これをもって法的な婚姻が成立したことになる。「結婚証」は赤色の表紙でパスポート大、中には夫婦の写真がある。最近はうるさく言わなくなったが、かつては旅行などで男女が同宿する場合、フロントで結婚証を提示しなければならなかった。

また、日本では最近婚姻届を出さない事実婚が増えているが、中国では事実婚は数年前まで非法同居と呼ばれ、不法行為とみなされた。現在でも法的な保護は受けられない。こうしたことをみても、中国の婚姻は国家による管理下に置かれていることがわかる。ただ、市場経済の進展によって制度が実情に合わなくなり、変更せざるを得ない面もある。

たとえば、これまでの「婚姻登記管理条例」では、重婚を防止するために、未婚か離別か死別かについて当人が所属する機関（勤務先）の証明書が必要だったのが、今年十月からの「婚姻登記条例」で廃止された。極端にいえば、今後は自己申告である。条例の名からも「管理」の文字が消えた。国家による婚姻の管理が緩められたというべきだろうが、日本の法務局のように戸籍を一元管理するシステムが整っていない中国では、重婚のトラブルが生じやすいという問題がある。交通の発達に伴い、人々は広い国土を自由に移動しはじめ、重婚は増えつつある。そして、重婚の被害者はたいてい女性である。

女性にとって歓迎すべきこともある。以前は結婚前に半ば強制的に実施されていた身体検査が廃止されたことである。この検査は女性にとってかなり屈辱的なものらしく、中国人男性と結婚した日本人女性は口を揃えて生涯忘れられない心の傷だと言う。今後は希望者のみの実施になる。

市場経済の導入によって法律の改訂や制度の変更が続く中国。婚姻制度の変更は、日本ではほとんど報道されないが、女性問題に直結するだけに、目が離せない。

「きょうだい」をつくる時代？

吉原 千賀
生活環境学部 助手
人間環境学科 生活文化学講座

CHIKA YOSHIHARA

「何人きょうだい？」二度はこう聞いたり、聞かれたりしたことがあるのではないだろうか。しっかり者の兄姉、ちゃっかり者の弟妹……。出生順位と関連づけて個人のパーソナリティーがそんな風にも評言されたりする。

子どもが親を選んで生まれてこられないのと同じように、家族関係の中でも自ら選べない関係の一つにきょうだい関係がある。そのきょうだい数の減少が叫ばれるようになって久しい。現在、二人きょうだいと三人きょうだいとで八割以上を占めるということであるから、数が減っただけではなくきょうだい数のバリエーションも少なくなったのである。

きょうだい数が減って、しかもほとんどが二人か三人きょうだいという現代、それが子ども達に与える影響が危惧されている。近年、きょうだいがいない（少ない）ならばつくってしまおうと、「きょうだい遊び」や「きょうだいグループ活動」「擬似きょうだいづくり」「昼間のきょうだい」と呼び名は様々だが、地域や学校で異なる学年同士の子ども達を一緒に遊ばせる試み、異年齢交流がさかんに行われている。

このように子ども時代の関係が注目されているきょうだい関係も人生の最終地点に差し掛かるとまた異なった様相を見せ始める。一昔前なら、いくらきょうだいが多くても「第二の人生」を共にすることは難しかったきょうだい達が「人生八十年時代」を迎え、仕事や子育てにも一段落した頃、法事、甥や姪の結婚式といった親族行事で顔を合わせたのをきっかけに付き合いが再開したりするのである。

今年のお彼岸に、私はあるごきょうだい達の「きょうだい会」に同席させてもらえる機会を得た。その様子を少し紹介しよう。

一番年上の長男八十二歳を筆頭に以下、長女、次男、次女、三男、そして六十七歳の四男の六人きょうだいは久しぶりに一同に会した。お墓参りとほとんど寝たきりで歩くのもままならない状態の長男のお見舞いも兼ねている。話題の中心は昔の思い出話で、女性陣が専ら話題の提供者である。しばらく耳を傾けていると面白いことに気がつく。きょうだいそれぞれの立場で見てきたことや当時の思い、記憶している事柄を言い合いながら、これまでの人生を振り返り、互いに認め合っているのである。例えば次のような具合である。

長女「私が（結婚して家を）出た後、弟らはえらい苦労をしとった。うちが一番楽してるわな、先に出て」

次男「いや、姉ちゃんは家出てからも苦労したわ。話を聞いとったらワシが一番楽してる」

四男「ワシなんか、兄ちゃん兵隊行った、次の兄ちゃんも学徒動員で行った。残されたワシらはどうなるんやろうとじーっと見とったんやから」

次女「いやぁ、そんなこと考えてたなんてうち知らんかったわなぁ。可愛そうに。どうぞこれから気楽にしてくださいな」

三男「そりゃ、俺らも兵隊に行ってて皆がそんなことになってたなんて知らんかったわ」

さらに話が盛り上がり宴もたけなわという頃、別室で寝ていた長男が自分も加わりたいとばかりに杖をつきながら出てきた。他のきょうだいは「総領の登場！」とはやし立てる。若い頃は頑固でわがまま、他のきょうだい達とは少し距離があったという長男も今は歩くのでさえきょうだいの助けが必要だ。そんな「立場の逆転」を楽しんでいる風でもある。

さて、現代の子ども達が人生の最終地点に差し掛かった時、このような形で「きょうだい」との付き合いが再開されるのだろうか。もし、されるとしたらそこで繰り広げられる「きょうだい」とのやり取りはどのようなものなのであろうか。興味深いところである。

寄稿 私のチャレンジ

手話を通して学んだことば

和田 悦子
大学院 人間文化研究科 博士前期課程
人間行動科学専攻 一回生

ETSUKO WADA

手話を学び始めたのは数年前、書店で偶然見つけたNHKテレビ講座のテキストがきっかけでした。私は、小中学校時代に転校生活を送り、短期間に多くの友だちと仲良くなる術として、相手のことばに意識を向けるようになりました。そして、人と人とが交わすことばを通して、その人の人間性を知ることの大切さを実感してきました。そのせいか、人とことばの関係に関心をもつようになり、それは年々強まっていきました。そんな私にとって、手話という手で語ることばの存在はそれだけで十分魅力のあるものに思えたのです。こうして始まった手話との関わりが、私の人生を大きく変えるとも知らずに。

「手話は聾者の言語である」―聾文化や手話に関する文献によく書かれ、聾者の間でもよくいわれることばです。これは、*聾者と聴者の双方に向けられています。ここでは聴者についてのみ触れますが、音声言語を用いて生活している聴者は、「音のない世界」というものがどういうものか、残念ながら真に理解することはできません。何らかの理由で聴力を失ったとしても、それが必ずしも手話という言語理解に結びつくわけではないのです。それはあくまで「聴こえる世界のなかで音がなくなった状態」であり、それは聾者の世界とは根本的に異なります。そのため、手話言語も外国語のつもりで学べといわれます。これは、聴者には理解しえない「音のない世界」を認識する上で大事な視点です。聴者には音のない状態は分かりえないけれど、そういう世界があり、そこに暮らす人たちがいるということを手話ということばによって認識できるからです。

このことを実感をもって理解できるようになるまでには実に多くのことを学びました。例えば、手話講習会に行くと、必ず「表情を豊かに」と言われます。私は決して愛想の悪い方ではありませんが、それでも「もっと嬉しそうに」とか「もっと痛そうに」などと注意されました。私たち人間のコミュニケーションは、声や表情・身振りなどによって表現のバランスをとりながら営まれているものだと思います。聴者は音声言語を、聾者は手話言語を中心にそれが行われています。おそらく聴者の手話は、声が担っていた表現力を手話や表情・身振りに補わせることをしていないために、手話言語としての表現のバランスが崩れ、聾者には実感をもって伝わりにくいのかもしれません。つまり、私たちは、表現活動として感情や身体全体でバランスをとりながら語ることをしているようなのです。

このようにことばについて考えを巡らすうちに、私は、人が学び自己を形成していくとはどういうことか、本格的に学んでみたいと思うようになりました。私が今こうして大学で学ぶことになったのは、実は手話との出会いがあったからなのです。

最後に一言。この手話の縁は学内にも及び、後期から文学部主催の手話講習会に携わることとなりました。奈良女子大学に手話を通じたことばの花を、みなさんと一緒に咲かせることができたらいいなぁと考えながら、教育文化情報学講座の仲間と講習会の企画を練っています。興味のある方は、是非ご参加ください！

*一般に、耳の聴こえない人を「聾者（ろうしゃ）」と言うのに対し、耳の聴こえる人を「聴者（ちょうしゃ）」と言います。

MY CHALLENGE

Sultana Razia

Doctoral Course of Graduate School of Human Culture

I am Sultana Razia, a final Year Doctoral Student of Graduate School of Human Culture at Nara Womenis University, Nara. I belong from Bangladesh, the World's most densely populated and under-development country, with almost half of its population surviving below the poverty line. It is located in southeastern region of Asia, and out of the total population of 130 million, 19 million are of school goings. The rate of literacy, even today is lesser than the illiteracy. The traditional and common mentality of the majorities also considers the education to girls a sin. Today, More than 2.00 million girls don't have even primary schooling. Similar to many under-developing countries of the world, women education is lag far behind as compare to that of men.

I was born on February 15, 1972 in the city of Mymensigh, situated 102 km, from the capital city Dhaka. My family living was middle class and income resources were quite sufficient for comfortable living. I grew up in that society where the main attitude of family heads towards a daughter is never favorable as compared to sons. The girls are considered only to be trained as household ladies, and could only improve their status after the marriage. Since my childhood, I was so brilliant and shining student and got special attention of my parents. My parents provided me all the facilities to study hard and I made all possible efforts to show them the good results. I was awarded with merit scholarship in 5th year of my elementary school. That achievement was an encouragement, and I continued my studies with further enthusiasm i.e. from highly school to college and university level. I completed my education throughout securing first class and with good grade.

The main aim of my life was education in the field of medical sciences, with special reference to Animal Husbandry. My studies in specific field were highly encouraged and supported by my kind father who himself is a senior most medical doctor. I got admitted in the Faculty of Animal Husbandry, Bangladesh Agricultural University, a renowned educational institution in Southeast Asia. Immediately, after the successful completion of my Graduation, I got married with Mr. Ahmad Jalaluddin. At the time of marriage, my husband was student in a Japanese University. Just after two months of my wedding ceremony, I accompanied with my beloved husband to Japan.

The year of 1999 was a significant and turning point of my life, I got a golden chance to avail the higher education in Japanese University. In-fact, it was a good opportunity to improve my education and also to see the living and education system of the technologically most advanced country of the world. During my stay and study in Japan I was astonished, that how much the Japanese people are dedicated, devoted, determined, honest, cooperative, sincere, and gentle. It was really a new experience for me to observe the kind and polite relationship between students and university teachers. I found the professors how free, frank and open heart to their students regarding the academic studies, and even more helpful in personal problems of their students. I also find the Japanese students, as most cordial, helping mind with foreigner students. This all was the basic source of inspiration and attraction to be a student in Japanese University.

During my studies in Shimane University, I had to face many problems in a totally new and different environment. As I was a novice to the modern techniques and the most latest equipment for experimentation and investigations. I had to spend a lot of time in laboratories, even some times from morning to late night to complete my research work and assignments. Lack of Japanese language was also a serious problem for me to communicate with all my laboratory members for smooth learning and successful achievements. During the coarse of my studies, I became pregnant. Being a pregnant lady, I really experienced that how difficult is to maintain the normal life routine. Also as a student with pregnancy, I had to carry out my experiments in the muddy paddy fields. Although that all was unbearable and I was not in a position to do all such activities. But, I accept it as a challenge to upgrade my future. After facing all such difficulties, finally I successfully completed my Graduation, but at the same time gave birth to my baby.

The year 2001, brought another Fortune of my career, that I got nice opportunity to join the Ph.D. course in Nara Women's University, under the kind guidance of a renowned scholar and genius professor Dr. Tadashi Oishi. I entered university for the Doctoral Course with a baby of one-month age. When I started my course as private student, without any scholarship and financial support, also my baby was sick and that time was really of hardships for me. But all that became easier to me with the kind guidance, support and cooperation of my Supervisor and his wife i.e. Mr. & Mrs. Tadashi Oishi, and I do not have words to express my gratitude for their continuous help. Now I am a final year Ph.D. student and has to study a lot to complete my research work and experiments, and now it is disclosed to me that I am bearing 2nd baby.

During the last 3 years I am fighting on different sectors, i.e. I am a household wife responsible for all related jobs; I am a mother and have to take care of a small baby, I am a pregnant and suffering from some problems, and above all also a doctoral students. The maintenance of all these at a time is a great challenge for me. But I never loose heart and keep my nerves strong and also trying my level best to maintain all these responsibilities in a successful manner. I am committed to face all these challenges with my strong will, open heart and kind cooperation of my husband, supervisor, and my laboratory colleagues.

かくことと私

金田 光世
生活環境学部 人間環境学科
生活文化学専攻 四回生

MITSUYO KANEDA

短歌を作りはじめて七年になる。この時間がわたしにもたらしたものについて、実は正確な把握はできていない。そして、それを把握することはこれから先も叶わないだろう。ただ、短歌との関わり方が変化するたび、この表現形式の持つ新たな側面に気づかされるということは確かだ。そして、多分、今後もそのようなことに繰り返し気づかされていくのだろうと思う。そしてそのなかで、短歌とともに流れていった歳月の含んでいるものや、あるいは短歌自身について、少しづつ深く知っていくことができるのだと感じている。

短歌を作りはじめて七年と書いたが、その間ずっと歌を作っていたのではない。大学二年の八月から大学三年の三月までの約一年半、わたしは短歌を作ることをやめていた。この一年半という時間は、わたしと短歌との関係にさまざまな変化をもたらした。そしてこの時間を経て、わたしは短歌の持つ多くの新たな側面に気づかされた。

やめていた間、わたしは童話をかいていた。

所属している吟行会「塔」

童話をかきはじめると同時に買ったスケッチブックに、わたしは無造作に思うままに言葉を並べた。そのような作業を繰り返し、三年の秋頃にあるひとつの童話が完成した。そして、その童話の完成の後、しばらくの間、わたしは言葉を使って何かを作ることをやめた。

童話をかくことは確かに楽しかった。ただ一方で、短いものをかかないということで何かを置き去りにしているように感じていた。その置き去りにしたものが何であるのかは分からなかったが、それがとても大切なものであることは分かっていた。

また、やめる前までの約四年半の間に形成された五音や七音、そして、その連なりとしての三十一音のそのリズムに対する感覚は決して消えることはなく、むしろ意識の底に深く浸透していることを思い知らされた。かかれた童話の隅々にまで、それははっきりと表れていた。五音七音の言葉の連なり、あるいはそれを匂わせる言葉の連なり。リズムの持つ心地よさから、意識的にそれを用いていたということもあった。しかし、意識していない部分にそのような連なりを見出したとき、そっとしながらもどこかで不思議な安堵感を感じたのを覚えている。それは、リズムに自身を委ねてしまおうというような気持ちだったと思う。

童話を作りながら、もう一度短歌を作りはじめるかもしれない、ということをどこかで微かに感じていた。そして、大学三年の三月に、わたしは再び短歌を作りはじめた。短歌を再び作りはじめて感じたことは、この表現形式の持つ豊かさだ。これは、あまりにも当たり前な言い方かもしれない。しかし、この当たり前のことを実感できるまでにはこれだけの時間が必要だった。

やめる前、わたしは短歌の持つある側面ばかりを意識し、それをただひたすら制約だと感じていた。五・七・五・七・七というリズム。三十一音という長さ。そして、その中で重ねられていく言葉の微妙な色合い。そういった一つ一つを、わたしは息苦しいと感じていた。それを制約ではないものと捉えることは、当時のわたしは無理なことだった。

しかし、再び短歌を作りはじめて、それらを制約と感じることはなくなった。それらは音楽にとっての拍子や和音のようなものであり、それをいかに扱うかは個人個人に委ねられているのだと感じるようになった。また、時にそれらから大きく逸脱し、その逸脱の持つ美しさを探し出すこともまたわたしたちに委ねられていることなのだと気づいた。

今、わたしは表現したいと感じる世界を探すことを、身体と分かちがたく結びついた欲求として日々深く感じている。そして、それを短歌という形式の上に表出させることにもまた、同じものを感じている。

中国農村ホームステイ記

秋津 元輝
文学部 助教授
国際社会文化学科 地域環境学講座

MOTOKI AKITSU

私は田舎の社会に関心がある。理由として研究上の意義をいろいろと書き並べることもできるが、その核心はやはり田舎が好きだからだ。最近はどこも忙しくなってきたが、それでも田舎には比較的ゆったりとした時間が流れる。それに山や川や田畑に目を休めながら調査(仕事)ができるなんて、なんとも長生きができそうではないか。

最初は国内の田舎を対象に調査、研究を続けていたが、三十歳を過ぎた頃から機会をえて海外の田舎にも足を伸ばすようになった。今までに、韓国、中国、ハンガリー、タンザニアの田舎にいって調査をおこなった。この四つの国を結びつけるつながりはない。言葉だって、全くばらばらだ。現地の田舎の人々の心を知ろうとして、その行く先に応じて現地の言葉を学ぼうとするが、そんなに語学の習得は甘くない。どれもはるかに中途半端なままで放置されている。このような姿勢は海外の社会を研究する者としては失格かも知れない。しかし、今さらの語学に期待を持てるはずもなく、開き直って万国田舎行脚と決め込みたい。それでも多少の比較研究の意味はあるだろう。

もっとも最近にいった海外の田舎は昨年の中国である。田舎に行くとなかなか宿がない。思えばタンザニアも韓国もハンガリーも、田舎の家を借りて住んだり、ちょっとした施設に頼んで泊めてもらったり、ホームステイしたりして田舎に滞在した。昨年の中国も一週間ほど農家にホームステイした。

その田舎は中国東北部遼寧省の南東部にあり、北朝鮮国境にわずか一〇数キロと迫った山あいにある。生活や聞き取りでのコミュニケーションは、同省出身で私のところにいる大学院留学生が同行してくれたのでまったく問題はなかった。しかし、四十歳を過ぎて新しい国の田舎でホームステイするのはなかなかにきつい。

この村には全部で五六〇戸ほどの世帯が住んでいる。そのうち六〇戸足らずは朝鮮族の世帯である。私がステイしたのはその朝鮮族の農家で、本家の系統ではあったが、家構えは村の平均からみると真ん中よりも低いくらいの世帯であった。家族は寡婦となったおばあさんとその長男夫婦、それに中学一年の孫息子が一人である。ただし長男は出稼ぎで大連に出て不在だった。

水路で洗濯する女性たち

部屋は全部で三つ。居室が二つで、あとは土間の台所である。うち二つの居室を私のためにあてがってくれた。だから、残りのおばあさん、長男の嫁、孫息子、それに同行した院生は最後の一室で眠ることとなる。それを考えると私はたいへんな優遇をうけた。食事の時もいつも気を使ってくれて、いっぱい食べろと白米をすすめてくれる。食事には近くに住む次男の嫁とその息子も一緒のことが多かった。次男もまた長男と同じところへ出稼ぎに出ているのだ。そんな食卓を囲む皆の厚意に応えるべく食べ過ぎて、村を離れた後でお腹をこわしたほどだった。

夜は早く寝て、朝は文字どおりニワトリの鳴き声とともに起床する。トイレはもちろん外にあり、しかもブタを囲った柵の隣なので、その鳴き声というかつぶやきのようなものが環境音となる。圃場にはトウモロコシ畑と水田が広がる。川沿いに続く水田の存在が朝鮮族の居住する証である。天気のよい日中に、灌漑水のせせらぎを聞きながら、あぜ道を散歩するのはなかなか気持ちがいい。水路で洗濯する女性たちの姿も、日本ではすっかり失われた風景だ。すき好んで野外で洗濯しているわけではないだろうが、やはりゆったりした時間の流れを感じてしまう。

この付近の北朝鮮国境はダム湖になっている。せっかくなので、ステイ先の嫁たちと一緒に国境の湖岸に出向き、船を出してもらって対岸見物もした。北朝鮮の山並みも別に中国側と変わりはない。しかしそこには人間の引いた国境があり、それは単なる想像物ではなく暴力をともなう。思わぬ展開に冷や汗をかきつつ、この旅もまた忘れ難い田舎行脚の一つとなった。

ケンブリッジ大学滞在記

和田 昌昭
理学部 教授
情報科学科 数理情報学講座

MASAAKI WADA

二〇〇三年七月二十七日から八月十五日にかけてイギリスはケンブリッジ大学のニュートン研究所で開催された研究集会「Spaces of Kleinian Groups and Hyperbolic 3-Manifolds」に参加した。この研究集会のテーマであるクライン群論は、数学の中でも関数論、双曲幾何学、トポロジーといった様々な手法が交錯し、現在最も華々しく研究が展開されている分野の一つである。今回の研究集会はクライン群論に関する研究集会の中でも数年に一度の大規模なもので、世界のトップレベルの数学者が百名近く参加していた。奈良女子大学からは、筆者の他に同僚の山下氏、研究員の市原氏が参加し講演等を行った。

ロンドン郊外のヒースロー空港からバスに乗ると、二時間半ほどでケンブリッジに到着する。ケンブリッジの街の中心はレンガや石造りの建物がほとんどで、その中にケンブリッジ大学の校舎が点在している。ケンブリッジ大学は八〇〇年近い歴史を持つと言うから、日本の大学とは比較にはならない。古風な校舎には歴史を持つ建物特有の威厳のようなものが感じられる。大学と言うのは街の中にあるものだと思っていたが、ここは大学の中に街があると言ったほうが適切なところだ。

数理科学センターの建物群

街の中心から二十分ほど歩いたところに、数理科学センターの建物群があり、ニュートン研究所はその一角に位置している。古風な石造りとは打って変わって近代的なデザインの建物に一歩足を踏み入れると、吹き抜けを贅沢に用いた実にゆったりとした空間が出迎えてくれる。三階建てなのだが、段差をうまく利用した設計で、どのオフィスからでも全体が見渡せるようになっている。中央には大小の机と椅子が配置されていて、いつでも好きな時間にコーヒーなど飲みながら思う存分議論ができる。周囲の壁には多数の黒板が配置されていて、研究者には至れり尽くせりの設計だ。トイレやエレベータの中にまで黒板がかけられているのには感心させられた。十人程度いるニュートン研究所のスタッフがまた素敵だ。到着初日のオリエンテーションにはじまり、必要な事務作業を実に効率的にこなしてくれる。

研究集会のほうは、我々が到着した翌日の二十八日あたりからぼちぼち講演が始まり、八月三～八日の一週間がメインの研究集会、講演はその後も数日続くというスケジュールだった。発表が終わった後に数日あるのは、発表内容に関する疑問点の解消や、さらに研究を発展させるアイデアを出し合うために非常に有効だと感じた。

さて筆者の発表はメインの研究集会の初日最初の講演で、筆者が五年前から開発を続けているクライン群論研究支援ソフトウェアをさらに発展させるアイデアに関するもの。続く山下氏の講演は、昨年彼が世界で初めて描いてクライン群論研究者達をあっと言わせたコンピュータによるベアーズスライスの絵に関するもの。それに、クライン群の極限集合の描画については大御所のDavid Wright氏の講演が続き、この日はコンピュータを使ったクライン群の研究に関する講演が並んだ。実は、コンピュータを用いたクライン群の研究では、世界で最も注目を集めているのが奈良女子大学なのだ。

ここ三年ほど毎夏イギリスを訪れているので、イギリスの天候と食事に関してはわかったつもりになっていたが、今年はニュースでも報道されていたように、イギリスでは非常に暑い日が続いた。今帰りの飛行機でこの滞在記を描いているのだが、機内で配られた新聞によると日本は例年になく涼しかったようでなんだか損した気分だ。食事のほうも予想を裏切ってくれればよかったのだが、残念ながらこちらは期待どおりで閉口した。早く日本に帰っておいしいものを食べたい。

〈在外研究〉

米国デービス滞在記

山口 智子
生活環境学部 助手
生活環境学科 食物科学講座

TOMOKO YAMAGUCHI

二〇〇一年十月二十日、私は同時多発テロの驚異冷めやらぬアメリカに飛び立った。空港での厳しいチェックに、明らかな緊張を感じ、乗客の少なさに更に不安は募るばかりであった。

研究先はカリフォルニア大学デービス校。サンフランシスコから車で約一時間の小さな大学街デービス。到着初日、キャンパスでは賑やかにアメフトが行われており、街はハロウィーンの飾りで溢れていた。とてもテロ直後の国とは思えない穏やかさであった。

Napaワイナリーでのテイスティング

翌日、私が第一に入手したのは自転車であった。一人あたりの自転車保有数一・六台、専用道の整備された自転車の街で、片道二十分の自転車通学生活がスタートした。日本の運転免許すら持たない私、お陰で身動きには困らなかった。所属したラボは、栄養学部で最大、総勢三十余名の大所帯。このラボで私はカカオや茶のポリフェノールの研究を行い、ラットと格闘する日々であった。

ラボでは毎月、potluckと呼ばれる持ち寄り形式のパーティーが行われた。ポリフェノールの研究に従事するメンバーが、そこで飲むのは必ず赤ワイン。その際、赤ワインと共にM社（共同研究先）から提供されたチョコレートも食し、自然にポリフェノールの抗酸化性に関して人体実験をしていたように思える。さすがにカリフォルニアワインの本場、赤ワインを口にすることが多く、さらに数カ所のワイナリー見学を通して、その美味しさを知ることができた。元来、赤ワインは渋くて苦手であったが、自分の舌でその味わいを感じることが出来た時は感動的、ちょっとした大人の女性の気分に浸れた。

アメリカの食事は“バンバーガー&コカ・コーラ”、“巨大ステーキ”の印象が強いが意外にも多彩であった。カリフォルニア州はメキシコに接することから、タコス他メキシコ料理が充実、ソルトレークではモルモン教徒特有の料理、ニューオーリンズではフランス植民地時代の名残であるクレオール・ケイジャン料理、サンフランシスコやボストンではクラムチャウダーやロブスター料理。更に日本、中国、韓国、ベトナム、タイ、インド等各国の様々な料理が存在したが、しかしまぁ、そのいずれもがボリューム満点！そのせいか、目を見張らんばかりに太った人の何と多いことか！アメリカでは肥満も病気の一つと考えられている。その予防のために、ベビーカーを押しながらでもジョギングする意識のある人々の姿をよく見かけたものであった。また、ヘルシーさから寿司も大人気であった。アメリカ人の好む寿司はマグロ、ハマチ、ウナギ、サーモンとのこと。彼らにとって寿司は“にぎり”であり、日本人なら誰でもが握れると思っていた。パーティーに寿司を作って来て、作り方を教えてと乞われ、何度か注文に応じたものの、怪しげな日本食を提供しないか、少々不安ではあった。にわかお寿司屋さん、日本では職人仕事のはずの“にぎり”を、困惑しながらも作ってみたのである。

滞在中、ハロウィーンに始まり、Thanksgiving、クリスマス、イースター、独立記念日など、常に暦上の何某かのイベントがあり、アメリカ人のみならず欧州、韓国、パレスチナ、南アフリカ、グルジア、ペルー、カンボジア、イランなど、まさにるつぼ、各国留学生と共に参加した。また幾度となくお家に招かれ生活ぶりを知ることも出来た。スカイダイビング、ラッペリング（崖下り）、乗馬、キルティング、結婚式、更にはお葬式までも経験。仕事とプライベートがはっきりしたライフスタイルがあったならこその充実ぶり。多くの知己と経験は私にとってとても大きな財産である。たった今も「冬に日本に行きたい」とメールが届いたばかり…若い時代に得たこの財産を増やすように努め、仕事の上にも反映させたい。

“Open Mind, Open Door”の精神に助けられて、気持ちよく過ごせた一年に深く感謝している。

出しました

BOOK

カミュ『異邦人』を読む

三野 博司
文学部 教授
言語文化学科
ヨーロッパ・アメリカ言語文化学講座

HIROSHI MINO

「あるべくしてなかった本が出たという感じですね。何しろフランス文学中もっともよく読まれる本なのに、精密な読解の本がなかったのは不思議なくらいです」とは、年長の仏文学者Kさんからの感想です。

他のフランス文学の教員からは、授業でなんどかカミュの『異邦人』をとりあげたことがあるけれど、今回この本を読んで、なんども「眼からウロコが落ちる思いがした」との評が送られてきました。

「規範的」あるいは「テクスト分析のお手本」といって、大学院生たちにぜひ勧めたいという感想もありました。私としては、『異邦人』はいわばモデルであり、他の（仏文以外の）文学テクストの読解にも役だってほしいとの願いをこめて、この本を書きました。

若いカミュ研究者からは、「このような『異邦人』研究書はフランスでも例がないから、ぜひ仏訳してください」と言われました。しかし、いまはそのエネルギーも時間もなさそうです（専攻長もやってるし）。

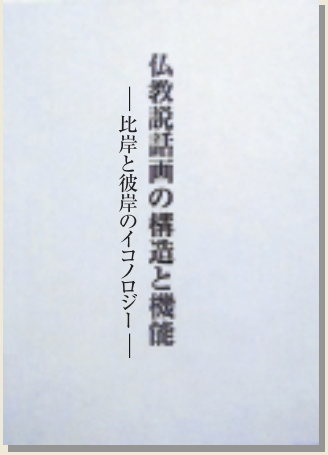
以上は、いずれも同業者からの感想です。したがって、ぜーんぶ、「仲間褒め」というやつです（たぶん）。その分割り引いてください。

（「カミュ『異邦人』を読む」三野博司著、彩流社、2002年、2200円+税）

死者と死につつある者のための美術史学

加須屋 誠
文学部 助教授
国際社会文化学科 古代文化地域学講座

MAKOTO KASUYA



人は死の問題に無関心ではいられません。それは云うまでもなく、私たち生きる者はいずれ必ず死すべき運命にあるからにほかなりません。しかも、死は普遍的な生理学上の問題であるばかりではなく、時代や地域によって関心の在り方が相違する文化的な問題でもあるに違いありません。本書は、わが国古代中世期を生きた人々がいかにこの問いに思いを巡らしたかを、現存する仏教説話画の図像解釈から探ろうとする研究書です。

たとえば現世と地獄と極楽浄土あるいはその中間を流れる三途の川など、 説話画には死を巡るさまざまなイメージが描かれています。それらは一見、荒唐無稽なものに見えるかもしれません。けれども各作品を精査すると、それぞれが作られた時代の現実的な社会状況（自己と他者の関係、世界認識の仕方）を踏まえつつ、それを此岸と彼岸の宇宙論的な関係に巧みに変換し投影することで、イメージの構築がはかられていることに気づきます。

こうした過去の説話画作品の研究は、今日の私たちが漠然と思い描く死の問題に対しても、一つの光を投げかけてくれるように思われます。捉えどころのないイメージの構造と機能を解明すること――それが、美術史学という学問の課題です。

（「仏教説話画の構造と機能」加須屋誠著、中央公論美術出版社、2003年、12000円+税）

こんな本を

BOOK

光に関心を持つ研究者にお薦めの一冊

岩渕 修一
理学部 教授
物理科学科 物性物理学講座

SHUICHI IWABUCHI

ナノ光工学とは、ナノメーターサイズの物質を対象としてその計測、加工、操作などを行う光技術です。このためには光自身もナノメーターサイズである必要がありますが、これまでは回折限界のために原理的に不可能と考えられてきました。しかし、最近「近接場光」と呼ばれるものが認識され、それに基づく技術はナノテクのブレイクスルーとして通信・計測・デバイス・メモリー・微細加工技術で急進展しています。では近接場光とはどんなものでしょうか？光がその波長に比べてずっと小さい球体に照射されたとき、光は透過、反射、散乱して伝搬してゆきますが、実は球表面に沿ってのみ伝搬する光があります。これが近接場光で、いわば球の半径程度の厚みを持つ非常に薄い光の膜です。エネルギーが遠方に伝搬しませんから、情報の取り出しは近傍に置かれた他の球体による近接場光の散乱波を通して行います。本書はナノ光工学の現状を実験、理論の両面から解説した世界初の専門書です。私は物性基礎理論の人間ですが、研究テーマの一つであるクーロンブロッケイドと呼ばれる特異なトンネル現象（メゾスコピック現象）が電磁場環境と密接な関係があることから執筆依頼を受け「理論的基礎」の1部分を執筆しました。光に関心を持つ研究者にはお薦めの一冊です。
（「ナノ光工学ハンドブック」大津元一・河田聡・堀裕和編、朝倉書店、2002年、22000円+税）

化学は知れば知るほど面白い

池原 健二
理学部 教授
化学科 機能化学講座

KENJI IKEHARA

「化合物の名前や構造式を見ただけでいやになる」、「化学は難しい」、「化学は危険である」など化学に対してアレルギーをおぼえる人や学生も多い。しかし、私達が目にするものは生き物をはじめ、すべて化学物質で出来ている。だから、化学は身近にある物の性質を理解する上で極めて重要で、かつ、面白い学問領域の一つであることは疑いの余地が無い。この二つのギャップを少しでも埋めようとの考えで、編集委員の一人として加わり、簡単で面白い実験を募集し、1984年に「化学を楽しくする5分間一手軽にできる演示実験」を発行した。これは、高校や大学などで活用され、大変好評であった。しかし、20年近くも経過し古くなったので、再び私も編集委員の一人として加わり、新たに演示実験を募集し、提案された実験を手分けしてすべて追試し、安全で面白い演示実験集を作成した。前回の本との繋がりが分かり、かつ、インパクトのある題名をとのことで「もっと化学を楽しくする5分間」として発行したのが今回の本である。前回の実験集と今回の実験集を活用し、「化学は知れば知るほど面白い」ということを学生さん達や多くの人々に分かってもらえればと念願している。
（「もっと化学を楽しくする5分間」日本化学会近畿支部編、化学同人、2003年、2600円+税）

こんな本を出しました

BOOK

批判的思考力を鍛える

KAORI ANDO

安藤 香織
生活環境学部 講師
人間環境学科 生活文化学講座

私は大学時代にはESS(English Speaking Society)でディベートをやっていました。大学1、2年の頃は心理学を勉強していたというよりもディベート学部に入学していたと言った方が正確なようなもので、毎日ディベートに明け暮れていました。たまたま出版社の人と話をした時にその話題になり、この本を出版する運びとなりました。ディベート仲間に助っ人を依頼し、ディベートをわかりやすく伝えるために何度もディスカッションを重ねる中で、このような形で完成することができました。第1部「ディベートの理解」、第2部「ディベートの実践」、第3部「ディベートを活かす」の3部構成になっており、第2部で具体的なルールや議論の方法を説明しています。昔大学時代にディベートをやっていた人の多くは「今でも役に立っている」と言います。「自分の仕事はディベートそのものだ」という人もいます。第3部ではディベートをどういう形で活かすことができるのか、取り上げてみました。「ディベートは難しい」「詭弁ではないか」と敬遠する人もいますが、一人でも多くの人にディベートを身近に感じてもらえればと願っています。ちなみに、表紙のデザインも気に入っています。

（「実践!アカデミック・ディベート:批判的思考力を鍛える」安藤香織・田所真生子編、ナカニシヤ出版、2002年、1800円+税）

禁煙は、新たな人生へのリセット

YUKO TAKAHASHI

髙橋 裕子
保健管理センター 教授

タバコがやめられない状態すなわちニコチン依存は医学的には脳細胞の表面レセプターに生じる疾病の一種であり、治療方法が確立されています。しかるに未成年喫煙は日本では学校秩序の問題として捉えられ、「叱正」「処罰」を中心とする処置がおこなわれてきました。未成年では成人より短期間でニコチン依存が形成されますが、ニコチンパッチなどの治療が成人よりも有効性が高く治療を受けた子どもたちのほとんどがその日から禁煙を開始しています。禁煙できたことが自信になり、子どもたちは一様に明るくなります。「禁煙は、新たな人生へのリセット」という言葉は、大人と同じように子どもたちの禁煙にも当てはまります。

しかしながらニコチン依存は、再喫煙によって容易に再発する疾患でもあります。いったん禁煙してもそれを続けることは、成人にとっても子供にとっても容易ではありません。日本国内で最初の未成年禁煙治療外来を受診した子供たちのドキュメンタリーを通じて「禁煙治療」の必要性を示すとともに、その限界も明示し「普通の子供が喫煙する時代」の日本の教育や子どもを取り巻く社会が抱える問題点を指摘した1冊です。

（「禁煙外来の子どもたち」髙橋裕子、東京書籍、2002年、1500円+税）

新任教官紹介

①所属学部・職名 ②所属学科・専攻分野 ③出身地・出身校
（学部、学科等別50音順）

SATORU MATSUDA
松田　覚

①生活環境学部　教授
②生活環境学科　生活健康学講座
　健康医化学　分子生物学
③山形県
　山形県立山形南高校
　山形大学医学部医学科
　東京大学医学系研究科第一臨床医学系

健康問題、ささやかな抱負

近年、健康問題は社会の一大関心事となっており、医薬のみならず衣食住といった身近な生活環境要因にも注目が集まるようになってきました。テレビのCMや製品のパッケージ等でも＜健康＞や＜安全＞の文字を見かけることが多いものです。そして今や医科学技術の発展にも助けられ、ヒトの（特に日本の）平均寿命は大幅に延びてきています。しかしながら疾病からの解放という道のりは果てしなく遠く、生活習慣病に加えて健康への新たな脅威として横文字疾患（SARS, AIDS, BSEなど）が最近次々とクローズアップされています。たとえ寿命が延びても、健康不安が多いと生活を豊かに過ごすことは困難でしょう。これから私は大学の皆さんと様々な健康問題特に日常生活に密接に関わる健康問題について、過度の不安を払拭すべく医科学的視点からいっしょに考えていきたいと思います。どうぞよろしくお願いいたします。

YOICHI YUSA
遊佐　陽一

①理学部　助教授
②生物科学科　個体・集団生物学講座
　生態学　動物学
③神奈川県
　神奈川県立横須賀高校
　京都大学理学部
　京都大学大学院理学研究科

理学部に赴任して

大学院では理学部に在籍し,農水省に職を得て応用研究の道に進むも,今ふたたび理学部に舞い戻る。この間,専門も海の生物の生態から稲の加害種ジャンボタニシの防除に移り,現在は基礎と応用の両立を目指す。

生命に共通するルールを追い求める研究は言うまでもなく理学であるが,ナチュラルヒストリーといった多様性を語る研究も理学である。しかしナチュラルヒストリーが面白いのも,共通原理のなかのバリエーションを楽しんでいるからであって,実は多様性を記載することで一般性を裏打ちしているのかも知れない。

基礎科学としての理学は,応用研究たる実学と相反しない。理学とはすぐに役に立たない研究の掃き溜めである,という誤解を否定するためにも,自分の研究にどういう意味があるのか,基礎と応用の両面から常に問い続けることを自らへの課題としたい。あ,でもその前に研究をしなくては。

MIYUKI KOISO
小磯　深幸

①理学部　教授
②数学科　現象解析学講座
　微分幾何学・大域解析学
③京都府
　京都教育大学教育学部附属高等学校
　京都大学理学部
　大阪大学大学院理学研究科

シャボン膜の数学

なんらかの「エネルギー」の極小値を与える曲面について、主として幾何学的な観点から研究しています。代表的な研究対象は、極小曲面、平均曲率一定曲面と呼ばれるものですが、これらはそれぞれ(おおざっぱに言うと)、面積(表面張力に対応します)の極小値、「体積一定」という付加的条件のもとでの面積の極小値を与える曲面です。したがって、それぞれ、石鹸膜、シャボン玉の数学的な抽象化であると言うことができます。現在は、結晶の表面等の数学的抽象化である「非等方的平均曲率一定曲面」について、米国の数学者と共同研究を行っています。これは、前述の極小曲面・平均曲率一定曲面の一般化ですが、一般的に考えることにより、対象の本質がいっそう良く見えてくる場合があり、興味深く思っています。今後も、数学の本質に迫る、国際的に評価される研究を続けていきたいと、奈良女子大学の美しい環境のもとで思いを新たにしています。

YOSHIKO FUJII
藤井　佳子

①大学院人間文化研究科　助手
②比較文化学専攻　欧米地域文化情報学講座
　イギリス・ロマン派文学　英米児童文学
③大阪府
　大阪府立岸和田高校　大谷女子短期大学　大阪女子大学学芸学部
　大阪市立大学大学院文学研究科英文学専攻
　奈良女子大学大学院人間文化研究科

ザナドゥへの道・奈良編

イギリス・ロマン派の詩人コールリッジに関する博士論文を書くのに、修士課程入学から数えてちょうど十年かかりました。ザナドゥとは彼が書いた詩「クブラ・カン」に出てくる楽園の地名です。英米の児童文学を学んでいた私が、英文学をやり直そうと思ったのは、ザナドゥという言葉に出会った時にそれを知らなかったからです。児童文学研究のために始めたことなのに、児童文学からどんどん遠ざかるようで途中、不安も覚えましたが、ロマン派が子どもを「発見」したこと、コールリッジの幻想詩が今のファンタジーと通じるものがあることを心の支えとしました。やがてコールリッジの娘セアラがファンタジーの礎となる物語を書いていることなどがわかり、やっとロマン派と児童文学がつながったと思える今日この頃です。これからもロマン派と児童文学を結ぶ「ザナドゥへの道」を歩いて行きます。尚、*The Road to Xanadu* はローズ(Lowes)という人が書いたコールリッジ研究の古典的名著です。

TAKETO KAI
甲斐　健人

①文学部　助教授
②人間行動科学科　スポーツ科学講座
　体育社会学
③広島県
　広島学院高校
　筑波大学体育専門学群
　筑波大学大学院体育科学研究科

からだの実感と社会

からだとは不思議なものだと感じてきました。自分のものであるはずなのに、なかなか思うようには動いてくれません。時には、隠しておきたいことや自分では気づいていないことまで露わにしてしまいます。食べ物や医療などを視野に入れると、からだを「自分のもの」と言い切ることにさえ、ためらいを覚えます。からだのあり様を実感しにくい社会になっているのかもしれません。

これまで過疎山村や農業高校などに足を運び、主にスポーツをしている人々に注目しながら社会について学んできました。世界的規模で都市化や情報化が進む中でからだの重要性、可能性が問われているように感じています。「内なる自然」とも呼ばれるからだに注目し、社会について考えてみたいと思います。また、それらの知見や前任校教育学部での経験などを生かしながら「体育」にも取り組むつもりです。

どうぞ宜しくお願いします。

外国人留学生による日本語スピーチ大会

平成15年11月10日（月）午後4時30分から、大学会館大集会室において、外国人留学生による日本語スピーチ大会が開催されました。
平成12年度から奈良地域留学生交流推進会議による外国人留学生スピーチ大会への代表選考を兼ねているこの大会は、本学在籍の留学生、日本人学生、関係教職員並びに学外の支援団体の方々、総勢70名の出席のもと開催され、今年は中国・韓国・ブラジルの3ヶ国からの留学生6名が出場しました。

スピーチは、日本語との出会い、自国と日本の文化の違いや交流、人への思いやり、留学生活における出会い等をテーマとした大変興味深い内容のものでした。

出場者名と演題

宋　玲姫（韓国）　「名外交に王道はない」
李　石蘊（中国）　「中国の食文化」
朴　順玉（中国）　「私の留学生活」
和田セシリアみゆき（ブラジル）　「私と日本語のつきあい」
楊　婷婷（中国）　「日本とアジア」
李　蘭英（中国）　「人への思いやり―日本人の微笑とサービス精神―」

広部奨学金授与式

平成15年度広部奨学金授与式が6月18日（水）大学事務局管理棟第三会議室で行われた。
同奨学金は、本学卒業生の故広部ひう殿（福井県出身　奈良女子高等師範学校本科数物化学部1期生　大正2年3月卒業）のご遺志により寄附された資金をもって設けられた奨学金制度で、人物・学業ともに優秀な本学生に授与するもので、今年度は次の8人に証書及び奨学金が学長から贈られた。

文学部	言語文化学科	4回生	渡部	真里
文学部	人間行動科学科	4回生	江口	布紗
理学部	化学科	3回生	出崎	美佳
理学部	生物科学科	4回生	鎌倉	真依
生活環境学部	人間環境学科	3回生	越中谷	史子
生活環境学部	生活環境学科	4回生	福井	美奈
人間文化研究科博士前期課程	生物科学専攻	1回生	梶原	ひとみ
人間文化研究科博士後期課程	比較文化学専攻	2回生	桑原	祐子

学長主催留学生懇親会

恒例の学長主催留学生懇親会が、11月10日（月）日本語スピーチ大会後の午後6時から大学会館生協食堂において、支援団体関係者はじめ、学長、各部局長、国際交流委員会委員長・委員、指導教官、チューター等約90名の参加のもとに開催されました。
学長の挨拶の後、スピーチ大会の表彰式があり、学長から李　蘭英さんに優秀賞の賞状を授与するとともに、スピーチ大会出場者6名には記念品の贈呈が行われました。
重定副学長（国際交流委員長）による乾杯の発声があり、新入留学生の紹介、留学生による太極拳や舞踊、伝統的な民族衣装の披露も行われ、終始和やかな雰囲気の中で交流を深めました。

外国人留学生実地見学旅行

9月25日（木）から26日（金）にかけて、香川県方面へ外国人留学生実地見学バス旅行に出かけました。
この見学旅行は、留学生が一時の間勉学や研究から離れて、留学生相互の理解を深め、親睦を図りながら日本文化の見聞を広め、日本をより深く理解してもらうことを目的に毎年実施しているものです。
1日目は瀬戸大橋を渡り、丸亀市「うちわの港ミュージアム」で特産のうちわ作りを体験しました。職人さんの実演に感心したり、指導を得ながらみんなで楽しくうちわ作りに取り組みました。作業工程の仕上げで、うちわの縁周りを細かい和紙で貼る手つきは真剣そのものでした。
泊りは塩江温泉で、温泉は初めてという人もいて入り方に戸惑ったり、浴衣の着方が判らなくて教えあったり、と和やかに愉快な一時を過ごしました。
翌日は、海の守護神で有名な讃岐の金刀比羅宮を見学。本宮に至る表参道785段の階段を上り、記念の集合写真を撮影の後、眼下に琴平の町を眺めながら下山し、一路明るい太陽と緑あふれる高原牧場「四国ニュージーランド村」に向かい、昼食・休憩をとり、美味しい空気を胸一杯に吸って、みんな心地よく心身をリフレッシュしました。
帰路は、淡路島を縦貫し、鳴門大橋、明石大橋を経て、手作りのうちわとたくさんの思い出を胸に、二日間の実地見学旅行を無事に終えることができました。

授業料免除についてのお知らせ

平成16年度前期分授業料免除及び徴収猶予に関する出願書類の交付及び受付を下記のとおり予定しておりますので、出願を予定している人は忘れずに厚生課で手続きを行ってください。
おって、詳細については1月下旬に掲示しますので注意していてください。
出願書類交付:1月下旬～3月上旬
出願書類受付:3月上旬～3月中旬

奈良女子大学
〒630-8506 奈良市北魚屋西町
TEL0742-20-3235
発行日:2003年11月15日
発行:学園だより編集委員会
印刷所:共同精版印刷株式会社